37

『平常流機道問答』について

池内早紀子
大阪府立大学大学院・人間社会システム研究科博士課程

2018 年 8 月長野仁氏より，『平常流機道問答』という古医書の画像が，国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースにより公開されているとの連絡を受けた．長野氏は，この書の内容から，「道教的な身体技法が，後藤艮山の一気溜滞（凝滞）説を踏まえた鍼治療に活用されていたことを論証できれば，道教の受容史という側面からも意義深い」と述べている．

『日本医学史』,『日本疫病史』を著した富士川游の蔵書は「富士川文庫」として京都大学，慶應義塾大学に分散して所蔵される．『平常流機道問答』は，慶應義塾大学の所蔵である．大きさ 15×20 cm，57 丁からなる 1 冊の写本である．著者の明記はなく，巻末に「安永四未歳霜月」とあることからおそらく 1775 年 11 月ごろに書かれたものだろう．表紙に『平常流機道問答』と題がある．表紙 1 丁，①平常流機道問答 34 丁，②無病修真丹 9 丁，白紙 1 丁，③平生流機道秘書 11 丁，裏表紙 1 丁で，内容は三部構成となっている．ただしなぜか富士川,『日本医学史』の医書目録には採録されていない．

①「平常流機道」は「門人問て曰く」に対し「答て曰く」という問答形式となっている．冒頭は「門人問いて曰く,『本草の序例に曰く，醫は意也,』……」ではじまる．この最初の問いに対し「唯人は一気凝滞に依りて病む.」,「其の一気凝滞無ければ，則ち息自ら平らかなるを以てす」と答え，病が一気凝滞に起因しその対応策が呼吸法であると説く．そして一気凝滞を解く法は『鍼灸大全』の奥旨より按じたという「細き竹の二寸ばかりなる管を以て，口の八方を気をつより（く）つめてソロソロと吹くべし」だという．そしてこの竹の管を口にくわえ息を八方向にゆっくりと吐く方法を図示して説明する．その後，頭痛，左の足痛などに対する効能を 14 条述べる．「当流の鍼道」というが，鍼を用いることは述べられていない．管見の限り，管を使う養生法は他に見当たらず，この書の大きな特徴となっている．

②「無病修真丹」は，冒頭「家傳の無病修真丹は愚の師圓水先生は百余歳にして動作衰えず……余に無病修真丹の一法を授けたまう」から始まる．引用書として甲乙経，本草序例，平人気象論，本神篇，八難，熊宗立，聚英，内経，類（経）注，老子などがあげられ，二十条の文章をのせる．

この書は「醫は意也」で始まるが，ここでも述べる．これは唐，孫思邈の『備急千金要方』等にみえる．類経注として引用する「善養生者守息」は，明・焦竑『荘子翼』の注にもある．また『古文參同契集解』,『女子丹法匯編』などにある「神是性兮气是命神不外驰气自定」も引用するなど，老荘や道教を取り込んだものとなっている．医書に道家の書を引用することは江戸期における道教の受容と関わるであろう．

③「平生流機道秘書」は，平常流ではなく平生流となっている．平らかなる気が重要であり，気の変により一気凝滞し病になる，と再び説く．二十の条文で「進勢気」,「退勢気」など種々の気を解説し，口伝とする．また所々に「古歌曰……」として五七調の短文を添えているが，古歌を添えるのは，明,『鍼灸大成』『鍼灸聚英』等の鍼灸歌賦の影響が感じられる．

この書は鍼道の流派とするが，鍼による手技には触れず，道教的要素を加味した，竹管を使う呼吸法のみを解く異質の養生書である．